地域在住高齢者を対象としたグループ回想法の効果

—セッション進行に伴う対人関係の質的変化を中心として—

菅　寛子　　大橋靖史
（埼玉県教育委員会）　（淑徳大学社会学部）

<要　旨>

本論文の目的は、地域在住高齢者を対象としてグループ回想法を実施し、その回想法セッションを通じての対人関係の質的変化を明らかにすることにある。そのため、回想法の効果については量的変化のみならず、セッションの場でなされる会話コミュニケーションのやりとりそのもののの質的変化も分析した。さらに、セッション内の場で構築された対人関係がセッション外、日常生活場面へと般化していく様子と、回想法施行によるメンバー個人の変化の意味についても検討した。対象者は、S 県 K 市の老人福祉センターを利用している 60 歳以上の高齢者 6 名（男性 2 名、女性 4 名）、平均年齢 70.5 歳（SD=6.8、年齢幅 62－80 歳）であった。分析の結果、セッション進行に伴う対人関係の質的変化には「他者との交流の積極化型」と「ひとりの時間増加型」の2パターンがあることが示された。また、その変化をもたらす要因として、セッション中の他のメンバーとのやりとりにおいて相方が積極的に関心を示すことの重要性を指摘した。そしてこれらの結果に基き、地域在住高齢者を対象とした回想法の効果について考察した。

<キーワード>

グループ回想法、地域在住高齢者、プロトコル分析、ソシオメトリー、アイデンティティ

【はじめに】

急速な高齢化が進む今日の我が国においては、高齢者に対する生活面のサポートのみならず、人生をよりよく生きるために、QOL、つまり生活の質の向上の必要性が指摘されている。

その中で、近年、多分野で注目されている心理社会的援助の一つに、回想法（Reminiscence Therapy）がある。これはグループまたは個人でそのメンバー各々の思い出を語り、自己洞察を深め、対人スキルの向上や生活の活性化を目指す方法である。1963 年、アメリカの精神科医 R.N.Butler は、高齢者が人生をふりかえるのは老年期に共通する内的経験あるいは心的過程であると仮定し、Life-review 概念を提唱した。そして、人は一生の中で老年期ほど自己意識を強く持つ時期はないと述べ、老化という自然発生的な現象により、環境が変化し、様々な機能が低下していく中で、自分がこれまで生きてきた人生の経験やその時の考えを再確認しようとするのが回想行為であるとした（Butler,1963）。

これまでの欧米における回想法研究には、地域在住高齢者を対象とした報告（Serman,1987：Haight,1998）があり、相互交流分析の場や会話分析の場として、セッションそのものが分析の対象となっていた。

ここで、本来、回想法セッション自体は、一回性の出来事であり、それを対象とした研究は個別記述的・事例的な研究となる。そのため、回想という全般的な記憶を対象とし、そのメカニズムを解明したり、逆に個人の内面のみを評価する方法では不十分であり、回想法セッションを実施しているその場における出来事を、行為として捉え、その行為自体を根拠に個人の変化を解明していくことが必要となり、その行為自体の質を捉えるべきであると考える。また、グループ回想法は、リーダーとメンバー、さらにはメンバー間といった 2 者以上の

間で生成される出来事であることは疑いがない。しかしながら、上述した欧米の研究では回想法の場をこのようなコミュニケーションの場であると捉えてはいるものの、実際のやり取りの中で生成される行為そのものを分析した研究ではなく、このような視点を持った日本における回想法研究はまだまだ数が少ない。

というのも、我が国におけるこれまでの回想法研究は、痴呆性高齢者を対象としたグループ回想法の実践報告が中心であった(黒川,1994:野村,1998:河田ら,1998)。そのため、健康な高齢者を対象とした研究は、施設入所者またはデイケア利用者の中で、痴呆症状が無い者を対象とした実践報告(野村,1992:有園ら,1998)がなされてはいるものの、スタッフの介入がより少ないセッションが可能と予測される、健康で、且つ、地域在住の高齢者を対象とした回想法研究の報告は皆無に等しい。

また、これまでの回想法研究において、高齢者がその過去を語ることで、新たな他者との関係性が構築される可能性が示唆され(Butler,1963)、対人関係の進展という回想法の効果が挙げられていた(Lesser ら,1981)。しかし、上記の視点をふまえ、具体的なセッション中の行為の中にその根拠を見出した研究はなされていなかった。

以上より、本研究では高齢者が自分の人生を語り合うことで対人交流の場となるグループ回想法を取り上げ、そのセッション進行プロセスにおいて他者の存在がどのような影響を及ぼし、その関係性がどのように構築されていくのかに注目し、分析を試みた。特に、この対人関係の変化を、孤独感尺度や参加者個々の発言数、発言時間といった量的な変化だけに求めるのではなく、発話の様子やその回想内容と、グループ内の役割を含めたメンバー間相互交流の変化を、つまり、セッションの場でなされる会話コミュニケーションのやりとりそのものの変化を質的な変化とし、そこに注目することとした。さらには回想法施行により地域在住高齢者の日常生活にどのような効果が期待されるのかを解明し、グループ回想法の効果を考察していくこととした。

【方法】

S 県 K 市の老人福祉センター S 荘で実施したグループ回想法セッションを分析の対象とした。

対象者:

センター内で実施したアンケート調査および施設利用希望者から、参加の意志があり、セッションの説明に理解を示した者の中から、男性 2 名、女性 4 名の計 6 名(平均年齢 70.5 歳±6.8SD、年齢幅 62～80 歳。)を選定した。また、この際、同時に安藤ら(2000)によって作成された AOK 孤独感尺度(10 項目)を実施し、その得点にメンバー間で片寄りのないよう調整し、メンバー間の以前からの交流が極力少ないもの同士を集めた。メンバーの基本的属性の詳細は Table1の通りであった。

手続き:

参加メンバー募集のために行ったアンケート調査から 3 ヵ月後、事前調査としてメンバーと対面式で質問をし、特性不安尺度;STAI Y-2(肥田野ら,2000)を実施した。その 2 週間後からグループ回想法セッションを開始した。セッションは週 1 回で全7回、各回 60～90 分程度施行し、時系列

Table 1 対象者の基本的属性

名前	年齢(歳)	性別	出身地	同居人数(人)	配偶者との同居	子どもとの同居	孫との同居	AOK 得点	STAI Y-2得点
A	62	女	東京・足立	6	離別	同居	同居	1	48
B	65	男	秋田	4	同居	同居	孫なし	3	38
C	68	男	宮城	2	同居	別居	別居	0	28
D	72	女	東京・葛飾	2	同居	別居	別居	1	32
E	76	女	秋田	3	死別	同居	孫なし	0	29
F	80	女	栃木	5	死別	同居	同居	2	46

に沿ったテーマ設定で行った。セッション中の観察記録はメンバーの了承のもと、ビデオカメラ 1 台を使用した。本セッションには、報告者と助手 2 名がスタッフとして参加したが、スタッフはセッションの進行役に徹し、セッション中はメンバーの話に共感し、聞き手として臨んだ。各回セッション終了後は、メンバー全員にその場で状態不安尺度; STAI Y-1(肥田野ら,2000)を記入させた。途中、第 2 セッション、第5セッション終了後に中途調査として対面式の面接調査を行った。セッション終了の2週間後には事後調査として対面式の面接調査を行い、AOK 孤独感尺度を実施した。

【結果および考察】

1、回想法施行による効果評価の検討

(1)回想法施行前後の孤独感の変化

回想法施行前後に実施した孤独感尺度得点の、メンバー6人の平均値は1.17と同数であり(t=0)、回想法施行による孤独感の軽減は立証できなかった。ここで、安藤ら(2000)による中高年(40～79 歳)のサンプルの平均得点は 1.29±2.09 であり、本研究の平均得点の結果はほぼ平均的な傾向が示された。また、得点の変化を個別に見ると、得点が増加したのは3名、減少したのは2名、変化がないのは 1 名とばらつきが大きかった(Figure 1 参照)。

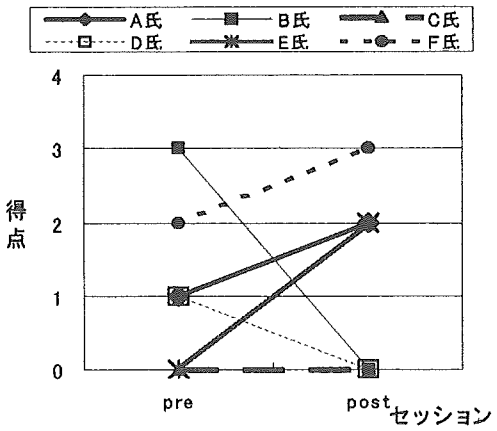

Figure 1 AOK孤独感尺度の変化

(2)セッション進行に伴う発言数の変化

セッション内の場面における各メンバー、および各スタッフの発言回数をカウントし、平均発言数を算出した。その結果、セッション進行と伴に、メンバーとスタッフそれぞれの平均発言数はともに増減を繰り返しており、一貫した変化は見られなかった。ただし、メンバーの平均発言数の、最初の第1セッションと最終の第7セッションとの間には、統計的に有意な差があり(t=2.92、df=5、p<.05)、セッション施行開始当初に比べ、終了時には発言数の増加が見られたことが示された。また、発言数の変化を個別に見ると、各回のテーマへの関心や他のメンバーを聞く態度の影響が考えられ、個人差のある結果となった(Figure2 参照)。

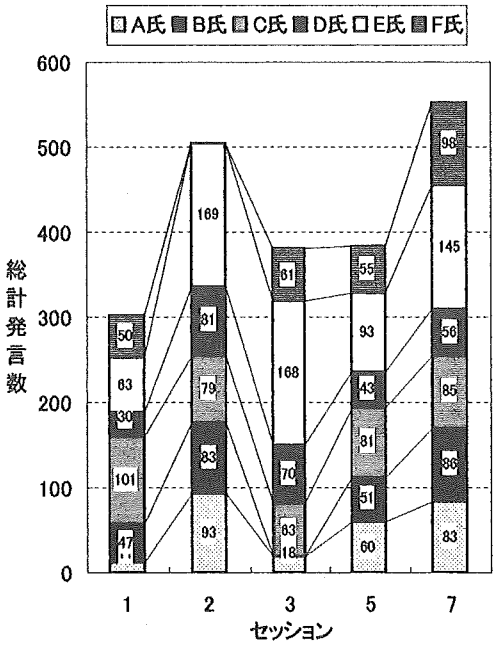

Figure 2 メンバー別の発言数の変化

(3)各セッション終了後の状態不安の変化

各回終了後に実施した状態不安尺度の平均値は、セッション進行にともない増減を繰り返しており、一貫した変化は見られなかった。また、初回と最終セッションの平均値を比較すると、35.7 から 27.7 と減少しているが、統計的な有意差はないことが示された(t=1.82 df=5)。次に、個別の変化を見ても、個人差があり、特にセッション進行と伴に状態不安尺度が増加していく傾向にあるメンバーも 2 名いた(Figure3 参照)。

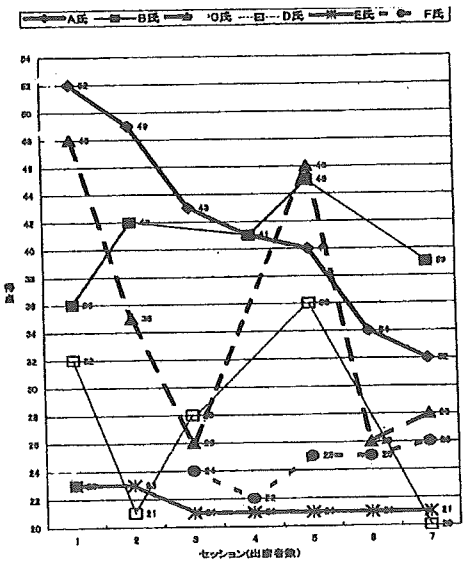

Figure 3 各メンバーの状態不安得点の変化

2、回想法施行による対人関係の質的変化の検討

回想法施行によるメンバー個人内の変化について、質問紙で測定された尺度や量的な変化による検討には限界があった。よって次に、セッション中の語りそのものに焦点をあて、その進行プロセスに伴う対人関係の質的変化を、3つの場それぞれについて分析した。

(1)第1の場におけるメンバー間交流の変化

まずここでは、分析 1 として、第 1 の場:セッション内の場におけるメンバー間相互交流の変化を、セッション中の会話プロトコルデータからのメンバーの発話連鎖を指標として明らかにすることとした。そこで、自由なテーマ設定であった 6 回目、欠席者が多かった 4 回目をのぞき、第1、2、3、5、7 セッションの全 5 回から分析の対象を抽出し、この範囲内をプロトコルデータに起こした。このデータをもとに、メンバー間の発話の連鎖に注目し、その組み合せと連鎖数を集計した。但し、セッションの流れに関係の無い発話は連鎖の回数から除いた。また、うなずきなどの非言語的な発言については、前者の反応として明らかなもののみをカウントした。さらに、メンバー数名が同時に発言した発話については、ビデオカメラ一台の記録では各メンバーの確定が困難であった為、全て省略した。尚、コ・リーダーの発言は非言語的なうなずきが主で、会話に影響する発言はほとんどなかったが、いくつか見られた連鎖する発話はリーダーとの連鎖に含んでカウントした。その結果、各セッション中の連鎖数は、第 1 セッション 238 対、第 2 セッション 420 対、第 3 セッション 319 対、第 5 セッション 297 対、第 7 セッション 423 対の合計 1697 対であった。

次に、各セッション毎のメンバー間の発話連鎖パターンをもとに、相互関係図を作成した。これは、野村(1992)を参考に報告者が考案したもので、図中の「X(人物を示す)→Y」の矢印は連鎖している発話の方向を示し、矢印上の斜線は連鎖数の程度を示している。ここで連鎖数の程度とは、連鎖数5毎に1として変換したものである(資料:Figure 4〜8)。

これによると、第 1 セッションの相互関係図(Figure 4)では、リーダーからメンバーへ、またはメンバーからリーダーへの発話連鎖数が多く、リーダーとのやりとりが主のセッションであったことが示された。続いて、第 2 セッションの相互関係図(Figure 5)では、メンバー同士の発話連鎖が急激に増え、その連鎖数も増大しており、特にE-A間、E-B間の連鎖数が多く、E氏(女性:76歳)を中心にメンバーの相互交流が行われ始めたことがわかった。第 3 セッション(Figure 6)では、再び連鎖パターンが減り、リーダーとの発話連鎖さえも減った。しかし、E氏を中心とした発話連鎖は継続して見られ、特に連鎖数の指標よりE-F間の相互交流が深まったことが考えられた。第 5 セッションになると(Figure 7)、E氏を中心とした発話連鎖の傾向は弱まり、連鎖数も減ったが、全体的に平均した発話連鎖数となり、メンバー間交流が均等化した様子が明らかになった。そして最終の第 7 セッション(Figure 8)では、全体の連鎖数の増大に合わせて、各々の連鎖数も頻回になり、発話連鎖がメンバー間の全パターンへと展開したことを示していた。また、リーダーが中心ではなく、メンバーの一人であるE氏を中心とした発話連鎖が主軸となってメンバー間の相互交流がなされていることが明かとなった。また、これまでのセッションで他のメンバーとの発話連鎖数が少なかったA氏

(女性:62歳)やB氏(男性:65歳)もその連鎖数が増大しており、第 3 セッションと同様に、E-F間の連鎖が多かった点も注目すべきであった。

以上より、セッションを追う毎にセッションの場における発話連鎖のパターンは徐々に多様化し、連鎖数の増加により連鎖の頻度も増していることが示され、メンバー間の相互交流がより活発になり、展開されていく様子が明らかになった。

(2)第 2 の場におけるメンバー間交流の変化

これまでの回想法研究において、個人回想法に対し、グループ形態の回想法では歴史の共有や心の交流をより可能にし、グループ終了後も互いのサポートとなる得る関係に発達することも多くある(野村,1998)と指摘され、回想法を実際に行うセッション内の場のみにとどまらず、セッション外の場でもメンバー間の交流がなされる可能性が示唆されてきた。よってここでは分析 2 として、セッション進行に伴う対人関係の質的変化を、第 2 の場:セッション外の場面における参加メンバー間の交流の様子から明らかにすることとした。そこで、セッション開始 2 週間前の事前調査、第 2・第 5 セッション終了後と 2 度実施した中途調査、および全セッション終了 2 週間後の事後調査時に、セッション以外の場でのメンバー間交流の有無に関する質問を対面式で行い、その結果をソシオメトリーに示し、まとめた。図中の片方の矢印(例:X→Y)は、一方選択(例:X氏がY氏と話をしたことを報告したがY氏からの報告がない場合、またはX氏がY氏を施設内で見かけただけの場合)を示し、両方向の矢印(例:X←→Y)は、相互選択(例:X氏、Y氏の両方から交流があったことが報告された場合)を示している。またこれらの矢印の太さを、実線と太線の 2 種類に分け、交流の頻度の段階を示す。さらに、メンバー間で新たに形成された集団を点線と実線の 2 段階の囲み線で示す(資料:Figure 9〜12)。

以上の結果より、6 人のメンバー内で 2 つの集団が構築される様子が明らかになった。

まず一つ目は、C 氏(男性:68歳)と F 氏(女性:80 歳)が中心となっている集団(以下、集団 X とする)であった。事前調査時(Figure 9)の C 氏と F 氏は、施設内で普段から同じ集団(以下、集団 Z とする)に属するものの、お互いの顔を知っているだけで、会話を頻繁にするというわけではないと報告した。しかし、1回目の中途調査(Figure 10)では両者から交流があったと発言があり、セッション外での両者の関係が深まったことが示された。また、第1セッション終了後、初めて施設に来た A 氏(女性:62 歳)を C 氏と F 氏が誘い、集団 Z 内で一緒に過ごしたと報告もあり、A 氏も集団 X に属するようになった。2回目の中途調査(Figure 11)では C 氏・F 氏共に、お互いが同集団 Z にいることは認識しているものの、特に話はしていないと報告があった。というのも、C 氏はもとからの集団Z内で過ごしている様子であったが、F 氏は施設内で E 氏(女性:76 歳)と出会ってから、彼女と話を多くするようになったことが関連していると考えられた。また、A 氏は1回目の中途調査で知り合った集団 Z 内の仲間と共に過ごしたと報告した。これにより、セッション以外での C-F-A 間の交流はほとんどないと判断でき、第 1 回目の中途調査の時点で確立した集団 X はこの時点で崩れたことが示された。その後、事後調査において(Figure 12)、C 氏と F 氏は数回の交流があり、共に相互選択しているものの、施設利用時間や日にちのズレにより、頻繁な交流はなくなっていった。また、A 氏は他のメンバーとの交流はなくなったが、これはA氏の都合により来所する機会が少なかったためであると考えられる。

もう一つの集団(以下、集団Yとする)はセッションを開始してすぐに、メンバー間で新たに構築された。これは主に B 氏(男性:65 歳)を中心とする集団であり、第 2 セッション中に D 氏(女性:72 歳)が B 氏の普段の施設内での様子(B 氏が配偶者と共に自家用車で毎朝来所していること)を述べたことより、B-Dの交流は初回のセッション終了後にすでになされていたことがわかった。また、B氏は 1 回目の中途調査時に、第1セッションで同じ郷里であり、偶然にも非常に近所であったことがわかったE氏に話しかけたと報告し、B-E の交流も初回セッション後すでになされていたことが明かとなり、集団 Y として新たなグループが形成

されつつあった(Figure 10)。そして、2 回目の中途調査(Figure 11)では D 氏と E 氏の交流も確認され、さらに E 氏や B 氏に誘われたことで F 氏も B-D-E と共にすごすようになり、この集団 Y が確立されることとなった。事後調査(Figure 12)では、F 氏からの報告は無かったが、B 氏、D 氏、E 氏それぞれから、施設内の宴会場で出会った時に何度か皆で過ごしたと報告があり、集団 Y がセッション終了後も継続していることが明かとなった。

以上より、回想法セッション施行によって新たな集団が構築されたことが明らかとなった。

尚、今回の調査ではさらに、この集団から展開された対人交流があったこともいくつか報告された。まず、A 氏は C 氏に誘われて共に過ごした集団 Z 内で、話の合う仲間が何人かでき、また、D 氏や E 氏は、同じく施設内の宴会場で過ごしている B 氏の配偶者と何度か話をしたことを報告した。さらに、E 氏は同じようにして D 氏がいつも一緒にいる友達とも交流があったと述べていた。

このようにして施設内で実施した回想法セッションで知り合ったメンバーが、普段の施設内の場でも交流をし、さらには、メンバー以外の新しい友人関係へと展開していく様子が明らかになった。

(3)第3の場における対人交流の変化

最後に分析 3 として、第3の場:日常生活場面において、各々のメンバーがメンバー以外の他者とどういった対人関係を構築しているかを明らかにしていくことを目的とした。そこで、事前・中途・事後調査時に日常生活、特に家族や施設内の他の友人、施設外の友人との関係に関する質問を対面式で調査し、まとめた。

その結果、他者との交流において積極的に行動するようになったことを報告するメンバーと、逆に、自分一人で居る時間が増えたことを報告するメンバーとに分かれた。

前者の例として、D 氏(女性:72 歳)は、「会で皆の話を聞いていて、それぞれの夫婦の生き方があることがわかり、自分も直さなくちゃいけないと思うようになった」と報告し、自らの配偶者への接し方を変えるような行動変容が示唆され、さらにセッションで思い出した自分の嫁時代の体験をふまえて、自分の娘にアドバイスをしてあげたことを報告した。また、A 氏(女性:63 歳)は、いままで外に出て人と関わるのが苦手であったが、セッションの参加をきっかけに、他者と交流する様々な場へと積極的に出かけるようになったことを報告した。

後者の例として、B 氏(男性:65 歳)は事後調査時に、施設内で以前は一緒に来所している配偶者やその仲間とカラオケやおしゃべりを主に過ごしていたが、「最近、一人で VTR や本を見るようになった。というのも、おはなし会をきっかけに自分の本当にやりたいことがわかるようになった」と報告した。また、E 氏(女性:76 歳)はセッション開始前に比べ、友達との付き合いでカラオケをするより、ひとりで本を読んで過ごすことが増えたと語っていた。

以上より、対人関係の質的変化の方向として、積極的に他者とかかわり、他者への関心を示す方向と、他者とのかかわりを継続しつつも、その中で自己を見直し、自己を尊重する方向の2つの変化があり、それに基づいて、セッション以外の場、さらには日常生活における場での対人交流が構築されている可能性が示唆された。

3、個別検討

次に、これまでの結果を総合し、セッション中の会話プロトコルをもとに考察した。ここでは一事例の分析の一部を紹介する。

D 氏 女性 72 歳 既婚(子どもは独立し、現在、配偶者と二人暮らし。週 1～2 回施設利用。)

分析3で、配偶者との関係、子どもとの関係、施設内の友人との関係と日常生活における他者との関係において最も顕著な変化を見せたのが D 氏であり、回想法施行後は以前からの対人関係においてより積極的に他者と関わろうとする態度が示された。この D 氏のセッション中の様子を探っていくと、ある一つの連鎖パターンが見出される。次に具体的なプロトコル例を示す。

プロトコル [第3セッション-連鎖番号147～149]
<姑は舅の世話を全くせずに、嫁であったD氏が世話したことを語っていた場面>

D1 ：おばあちゃん（姑）は私が嫁にいった途端、はね
をのばしちゃってね。～中略～OMやAM（芸能人）
が好きでね。お弁当作ってははやばやと出かけちゃうの。
（他者との体験の語り）
E1 ：おばあちゃんはうれしかったんだね（メンバーからの評価）
D2 ：そうなの。うれしくて、うれしくてね（評価の肯定）
『あんたがお嫁に来てくれたから、私はこうやって
自由に出させてもらってありがとねー』っておばあちゃん、
死ぬときに言ってましたよ。（新たな情報の付加）

ここでのポイントはＤ氏が思い出の中の姑とのやりとりを語り（D1）、これを聞いていたＥ氏が、姑はＤ氏が嫁に来たことをうれしく思っていたと考え、それをＤ氏に伝えることで、Ｄ氏も、うれしそうに過ごしていた姑の様子を思い出し、さらにそれを裏付けるような姑の最期の言葉を紹介していた。

このようにＤ氏は、セッション内で自らを語る時に、過去における他者、特に家族との関係の中での自分の思いや体験を述べることが多く、それに対して他のメンバーからの賞賛や評価を受けて、Ｄ氏自身が『そうかしら』『そうよね』などと気づきを体験し、さらに新たな事実を付け加えたり、詳細を述べるパターンがあった。これらは第2セッションでは4ヶ所、第3セッションでは9ヶ所、セッション開始から30分遅刻した第5セッションでは6ヶ所、第7セッションでは5ヶ所の合計、24ヶ所あった。

このようなセッション中のやりとりにより、Ｄ氏にとって本セッションは、過去における他者との関係を肯定的に捉え直し、さらにはセッション外の日常生活における家族との関係や他の対人関係においても、より積極的にかかわろうとするきっかけとなった場であったと考えた。

以上のような分析をメンバー個々にした結果、事例として示したＤ氏の他に、Ａ氏・Ｆ氏の３名はセッション内の場で他者への関心を示し、セッション外の場でも他者と積極的に関わろうとその行動の変化が示された。このパターンを「他者との交流積極化型」と呼ぶこととする。逆に、セッション内の場で自己の見直しがされ、アイデンティティを確認する場となり、セッション外でもひとりでいる時間が増え、自己の向上を目指す行動へと変化が示されたものがＢ氏とＥ氏の２名あった。このパターンを「ひとりの時間増加型」と呼ぶこととする。またＣ氏はセッション内の場で自分の話を多くすることに満足をし、自己を他のメンバーに示す場となったが、セッション外での対人関係において変化は示されなかった。

よって、地域在住高齢者を対象にグループ回想法を施行することで、メンバーの対人関係において、「他者との交流積極化型」と「ひとりの時間増加型」という2つのパターンの質的変化が見られることが明らかとなった。そして、その変化には回想法セッションを共に過ごした他のメンバーの存在が影響を与えており、自己の語りに対して他のメンバーからの関心を受けたり、他者の語りに対して関心を示すことが必要であることがわかった。また、セッション内での変化がセッション外、日常生活場面へと次々に般化していくプロセスも指摘できた。

【まとめ】

以上の結果を導き出すことができたのは、本研究の対象が地域在住の高齢者であったところによる。痴呆性高齢者を中心に展開されてきた従来の回想法研究において、その対象者はほとんどが、地域からある程度隔離された、施設の居住者である場合が多かった。そのため、回想法施行によってその前後の環境が変化することはほとんどなく、本研究で明らかとなったセッション外の場、日常生活の場へとその効果が般化していく様子を観察することはできなかった。さらに、回想法セッションの場で新しく知り合うことも少ないと考えられる。特に、メンバーがその友人や家族との関係において質的な変化を示したのは、日常生活を共に過ごし、その関係が今後も継続していく相手であり、かつ、これらの関係は過去の共有があるためであることが指摘できる。以上の点から地域在住高齢者を対象とした回想法セッションの効果が考察できた。

今後の課題としては、地域在住高齢者を対象とした回想法の実践がより充実し、高齢者自らのリーダーシップでセッションが進行する場の提供と、その効果検討、さらには回想法という正式な手続きに則ったものではなく、身近な友人や家族など共有体験を持つ高齢者同士で回想を用いた会話

を積極的に行うことの効果検討を展開していきたい。

【引用文献】

有園博子・佐藤親次・森田展彰・松崎一葉・小田晋・牧 豊 1998 高齢者に対するニオイを用いた回想療法の試み 臨床精神医学, 27,63-75.

安藤孝敏・長田久雄・児玉好信 2000 孤独感尺度の作成と中高年における孤独感の関連要因 横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ(社会学科), 3, 19-27.

Butler,R. 1963 The life review : An interpretation of reminiscence in the age. *Psychiatry*, 26, 65-76.

Haight,B.K. 1988 The therapeutic role of a structured life review process in homebound elderly subjects. *Journal of Gerontology*, 43, 40-44.

肥田野直・福原眞知子・岩脇三良・曽我祥子・C.D.Spielberger 2000 新版 STAI マニュアル 実務教育出版

河田政之・吉山容正・山田達矢・旭俊臣・渡邊晶子・野村豊子・服部孝道 1998 痴呆に対するデイケア, 回想法の効果 老年精神医学雑誌, 9, 943-948.

黒川由紀子 1994 痴呆老人に対する回想法グループ 老年精神医学雑誌, 5, 73-81.

Lesser,J.,Lazarus,L.W.,Frankel,R.,& Havasy,S. 1981 Reminiscence group therapy with psychotic geriatric inpatients. *The Gerontologist*, 21, 291-296.

野村豊子 1992 回想法グループの実際と展開:特別養護老人ホーム居住老人を対象として 社会老年学, 35, 32-46.

野村豊子 1998 回想法とライフレビュー: その理論と技法 中央法規

Sherman,E. 1987 Reminiscence groups for community elderly. The *Gerontologist*, 27, 569-872.

資　料

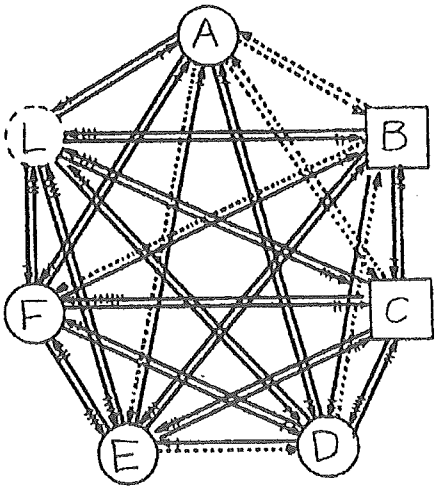

Figure　4　第1セッションにおける相互関係図

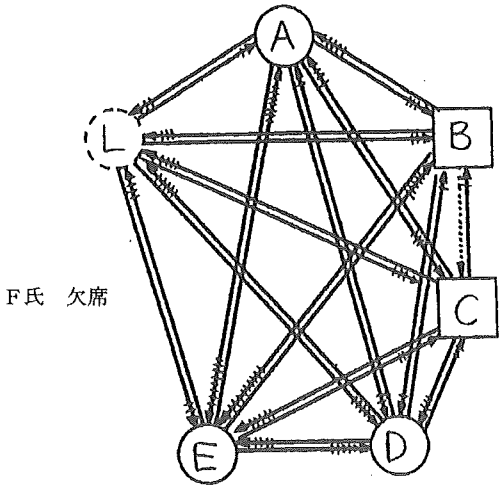

Figure　5　第2セッションにおける相互関係図

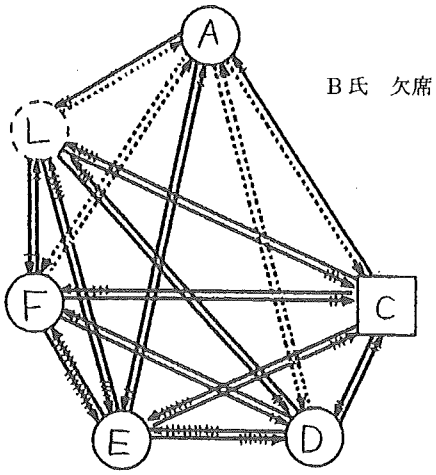

Figure　6　第3セッションにおける相互関係図

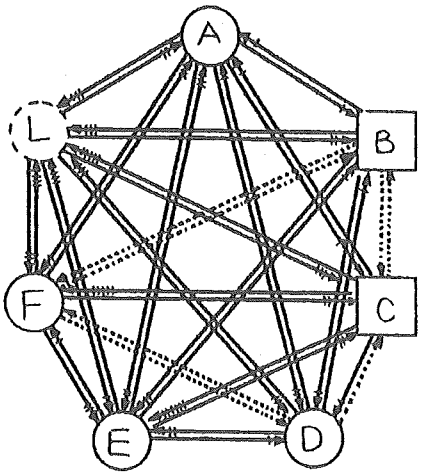

Figure　7　第5セッションにおける相互関係図

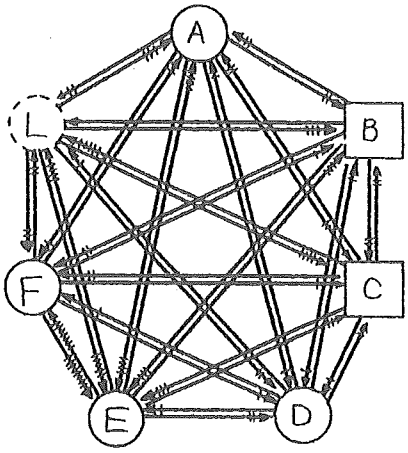

Figure　8　第7セッションにおける相互関係図

＊Figure4~8中の注：実線矢印　発話連鎖あり

矢印上の斜線　連鎖数

点線矢印　発話連鎖なし

A~F　メンバー6名

L　リーダー　　を示す

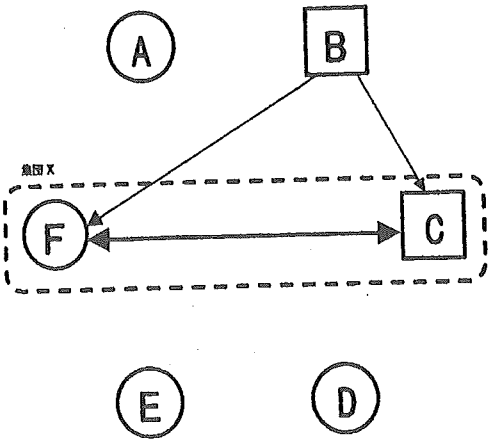

Figure 9 セッション開始2週間前のメンバー間交流

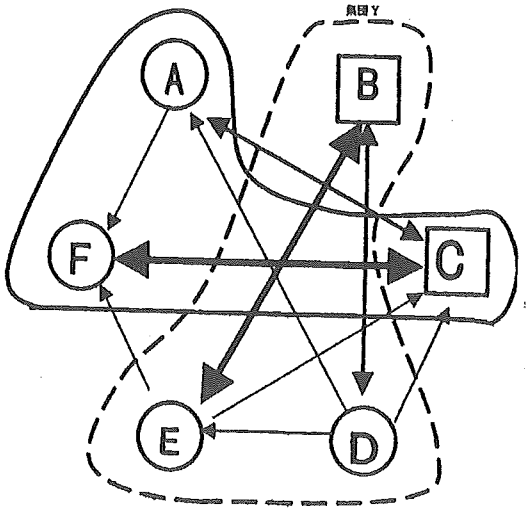

Figure 10 第2セッション終了後のメンバー間交流

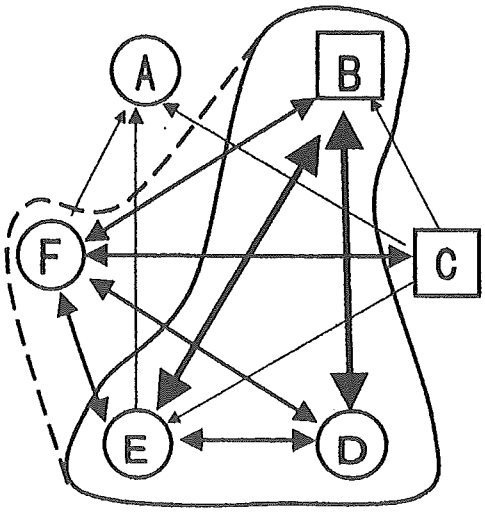

Figure 11 第5セッション終了後のメンバー間交流

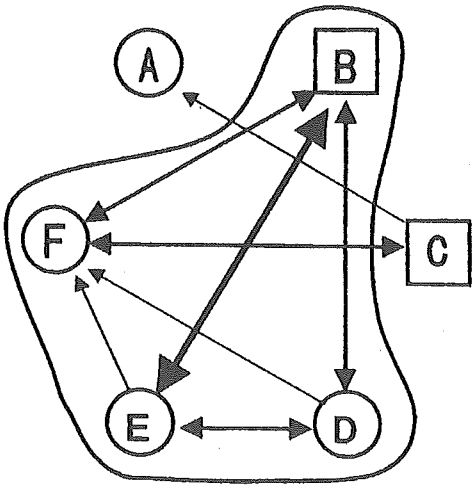

Figure 12 全セッション終了後のメンバー間交流

＊Figure9~12 中の注：A～F　メンバー6名

片方向の矢印　一方選択

両方向の矢印　相互選択　を示す